

# 街づくりエクステリア用品のデザイン開発

水野 潤<sup>\*1</sup>、松下福三<sup>\*1</sup>、今西千恵子<sup>\*2</sup>

## Design of Street Furnitures for Tokoname City

Jun MIZUNO, Fukuzo MATSUSHITA and Chieko IMANISHI

Tokoname Ceramic Research Center, AITEC<sup>\*1</sup> Seto Ceramic Research Center, AITEC<sup>\*2</sup>

陶磁器産業にあっては、長引く不況に加え消費者ニーズの多様化、海外製品の流入などから非常に厳しい状況が続いている。そのため、新奇性のある商品による新たな市場開拓が望まれている。幸い常滑市では「やきもの散歩道」を始めとする伝統的な陶業地らしさが残っており、毎年観光客が増加している。さらに、平成17年に国際空港の開港が予定されている。こうしたことを背景に、市街地の景観向上のための陶磁器製品開発を目指し、やきものストリートファニチャーのデザイン提案を行った。

### 1. はじめに

市街地の景観向上を図る陶磁器新製品開発として昨年度は、店舗用エクステリア用品の開発を目的に、やきものの看板(常滑市を代表した陶磁器製品である土管から、「土看板(どかんばん)」と命名)をデザインし提案を行った。これは通りの目立つところに掲げられる看板をやきもので作ることによって、来訪者に対して「やきもの街」を強く印象づけることを狙ったものであるが、これまで一般的であった多量生産商品ではない一品生産商品市場の可能性を探る意図もあった。

### 2. デザインと試作

#### 2.1 アイテムの選定とスケッチ

昨年度は店舗という私的な空間を演出するやきものの看板をデザインしたが、本年度は公共空間である歩道を演出する陶磁器製品の開発を目指した。

##### 2.1.1 U字溝蓋

U字溝は全国的に普及しており、どこの街でも見られる代表的な標準資材である。蓋にはコンクリートまたは鉄製のグレーチングが多く使用されているが、無機質な印象が強い。写真1に示すように、厚みの変化を持たせたプレーンなタイプと蓋が花壇代わりになるプランター機能を持たせたものの2タイプをスケッチした。プランターなどの付加機能も加えることができ、舗装のレンガと一体感のあるプロムナードを形成する。

##### 2.1.2 ツリーサークル

都市景観にとって、潤いと安らぎを与える街路樹は必然ともいえる。街路樹の根本の保護と美観向上を目的としてツリーサークルを設置する場合が多い。その大部分は鉄製で堅牢性はあるが重厚なイメージであり、また

木製の場合やさしい感じがするが耐久性に不安がある。陶磁器製のツリーサークルは両者の中間的な特性を持ち、環境になじみ易く、違和感のない素材である。写真2に示すようにプランター、灰皿、ベンチなどのパリエーションの展開も可能で、その街独自のパターンや柄などの装飾要素についても小ロットでも対応しやすい。

##### 2.1.3 マンホール蓋

マンホール蓋もツリーサークル同様無骨な鉄製品が多い。最近では各市町村独自の絵柄がつけてあることが多くなり、街の景観を意識した商品となってきている。今回試作したマンホール蓋では、やきものだけでは強度が不足するため、写真3に示すような皿状の鉄製の蓋部材を利用したが、衝撃が加わる車道での使用は不可能であり、歩道や公園での限定的使用に限られる。少量生産が可能な陶磁器の特性をいかし、観光スポットや歴史的な建造物前、商店街などでのローカルな使用が適している。デザインは常滑市を代表するイメージをモチーフにウインドサーフィンやヨリコ造り(伝統的な甕の成形法)などのスケッチを作成し(写真4)その中から観光客に人気の散策路「さんぼ道」と代表的な産品である「まねき猫」をモチーフに選び試作を行った。なお陶板の固定には目地砂を用いている。(写真5, 6)

### 3. 結び

今回のデザイン提案は消費の多様化が進む中で、モノを大量に生産し安く供給する従来の生産方法ではなく、少量で、職人的技術を生かした商品開発を目指したが、少ロット故の歩留まりや販売のルートなど解決しなければならぬ課題も多い。

\*1 常滑窯業技術センター 応用技術室 \*2 瀬戸窯業技術センター 応用技術室

写真1 U字溝蓋スケッチ

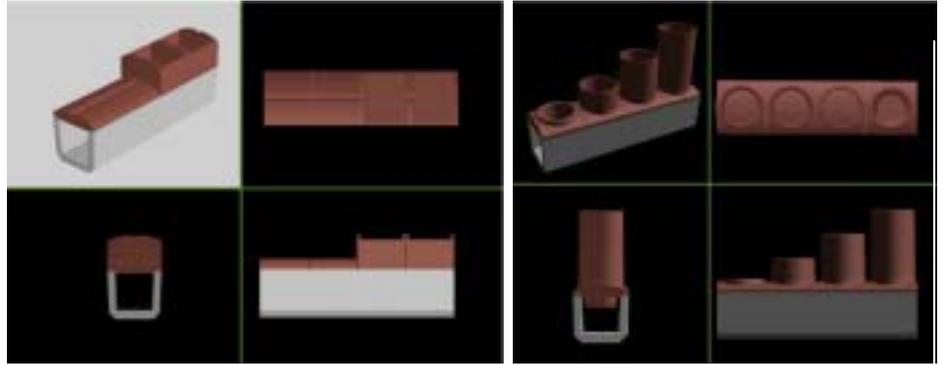


写真2 ツリーサークルのスケッチ



写真3 埋め込みタイプ鋳鉄製蓋



写真4 マンホール蓋スケッチ



写真5 マンホール蓋「招き猫」



写真6 マンホール蓋「さんぼ道」